

- (11) Ekkehard 年代記 1104 の條
- (13) Vita Henrici IV 八節
- (14) Vita Henrici IV 九節
- (15) Ekkehard 年代記 1103 の條
- (16) Ekkehard 年代記 1104 の條
- (17) Ekkehard 年代記 1106 の條
- (18) Vita Henrici IV 十一節
- (19) Ekkehard 年代記 1106 März の條
- (20) Ekkehard 年代記 1106 März の條及 Vita Henrici IV 十二節

- (21) Vita Henrici IV 十三節
- (22) Ekkehard 年代記 1106 の條
- (23) Vita Henrici IV 十三節
- (24) Vita Henrici IV 十三節
- (25) Ekkehard 年代記 1106 の條
- (26) Vita Henrici IV 十三節
- (27) Ekkehard 年代記 1106, Juli の條
- (28) Giesebrecht, Gesch. d. deutsch. Kaiserzeit Bd. 3. S. 756

雜 纂

考古學の葉 (第四回)

文學士 濱田耕作

第三章 調査及發掘

一、調査記録の方法(一)

三〇、考古學研究の第一歩は研究の資料對象を

調査記録するに在り。此の方法を大別して(一)寫真模造等による器械的複製、(二)圖寫測量等による記録及び(三)文書による記録の三となす。

學術的研究に於いて、其の資料の正確なる記録を製作するの必要なるは言ふを須たず。而かも考古學は常に空間的外延を有する物質的資料を研究の對象とするを以て、是は時間的經過を記述するに適當せる言語文字のみによりては、到底完全に記録すること能はず。寫眞圖書等同じく空間的外延を有するものによりてのみ之を期し得可きなり。

三一、寫眞 器械による複製的記録の中最も重要なるを寫眞となす。ミハエリスは其著「第十九世紀に於ける考古學的發見」(Michaeli: Archaeo-Logischen Entdeckungen in den 19 ten Jahrhundert) に於て、近世考古學進歩の大原因の一として寫眞術を教へたるは洵に以あることなり。即ち從來圖畫による複製以外に其の精確の度を加へ、製作の速度を増し、而かも費用を節すること幾何なるを知らず。殊にコロタイプ其他の寫眞製版術の發明

應用は報告書の体裁を一變し、遺物の比較研究遺跡の状態の保存に裨益し、斯學の普及に與りて力ある、考古學研究史上に一大革命を將來せりと云ふも不可なきなり。

寫眞機はレンズの真好なるを選む可しと雖も、建築物の撮影等を主とする場合の外、廣角レンズを用ゐるの要なし。暗箱三脚の類は發掘及探檢的旅行に際しては、特に頑丈なる木製のもの宜しとす。種板は「カット、フィルム」の遞送運搬に輕量にして且つ破損の憂なきに勝るものなしと雖も、普通硝子乾板を以て經濟的なる一般方法となす。

寫眞の大きはカビネ形を最利便とす。これ以上の大形は撮影困難にして専門家以外のもの、使用に適せず。細部を特に大きく寫す場合の外、遠距離より之を寫すを以て、影像の正確を期し得可く小なる物品は留針等に於て隙壁に固定するよりも、細砂上に置きて之を俯視して撮影す可し。

撮影に際して其の對象に適當なる化粧(Chesing)を施すを肝要とす。例へば陰刻せる記銘類は其の形質に應じて、白堊若しくは木炭の粉末を刻線中に搗込み、或は細砂を振りかくる等の方法あり。要するに色彩のコントラストを強くし、物象を明確に映出せしむるに在り。故に光線は強き直寫光線によ

り陰影を深からしむる可き場合最も多し。近者氣球飛行機等より遺跡を俯瞰し、プランを浮彫的に示せる寫眞あり。一九〇〇年伊太利羅馬のフォラムの遺墟に於いて、此種の俯寫により Thocus 紀念柱附近の敷石上なる文字を始めて明かに讀む（つら）を得たり。 (Hilfsen; Roman Forum, P. 149)

三二、拓本 寫眞は多くの場合に對象物の縮小を意味す。之に反して細き陰刻低き浮彫等を原大に複製するの便法は拓本 (Rubbing) に若くは無し。是は支那に於いては少くとも唐代より存在したるも、西洋に於いては其の方法今に至りて完全なる發達を見ざるは紙及墨汁の關係に由るなる可し。拓本は其の迅速と經濟的なる點に於いて寫眞を凌駕すと雖も、正確其他の諸點に缺くる所あり。從來東洋の考古學者は單へに此方法を賞用せしも、吾人は拓本は寫眞の補助として之れを用ゐるの程度たらしむるの覺悟を要す。拓本にのみ依據する考古學は畢竟舊式考古學の譏を免れざる可し。

拓本の方法に二種あり。乾拓法及水拓法是れなり。前者は後

者より輕便なるも拓影の明瞭を缺く。たゞ拓に適せざる物品及迅速を要する場合に之を用ゆべきなり。又た拓本は物品を毀損することあるを以て、豫め細心なる注意を怠る可からず。乾拓法には薄美澁紙等の彈力ある紙を用ゐ、水拓法には唐紙白紙畫仙紙棉紙等を用ゐる。物品の大小精粗により紙の厚薄地質を選む可し、又た拓本用のタンホ大小精粗各種を用意するを要す。墨は普通の硯墨開明墨汁の外黒印肉を精製したる油墨を使用するを便す。又々巨大なる物象は始めより紙を切りて之を拓ち、後連續せしむ可く、飯粒ヒン膏藥等を以て紙隅を固定せしむるの用意を怠る可からず。

三三、紙型石膏型等 浮彫及陰刻の類は又た紙型 (Paper Squeeze) 封蠟「モデリング、コムボジション」粘土錫箔等によりて型を取り、之に石膏を溶入して複製を作るを得可し。殊に泉貨は之を原物よりも、錫箔型より製せる模本より撮影するを以て、陰影の均一を得るに宜しきを以て、西洋考古學者の常に愛用する所なり。又た丸彫り其他の物品の複製は、粘土寒天セラチン等の型によりて石膏を以て製することを得可く、石膏 (Plaster of

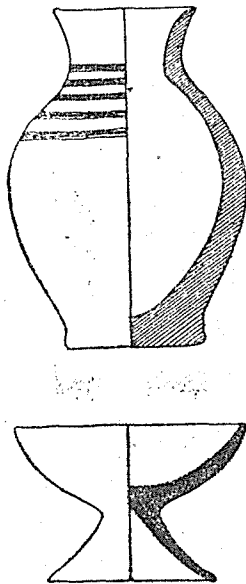
Paris)は斯學者の研究室に於いて須要缺く可からざる材料なり。其の迅速に凝固して加工に便なることは獨り此のもの、專有する所にして、模型の製作と器物の修理とに於いて之に勝れる材料あるを知らず。

二、調査記録の方法(二)

三四、圖寫。寫眞は其の技術の未熟なる場合は勿論、光線の感入種板器械の破損等により複製の完全を保證し得ざることあるのみならず、到底寫眞にては現はし難き遺跡の断面側面等あり。此れ等は圖寫の法によりて記録する外ある可からず。されば考古學者は美術的繪畫の能手たらざるも、常に實物の寫生と製圖との練習を怠る可からず。而かも圖寫に従事することは一面實物觀察の正確を訓練するに資すること大なるものあり。又た圖寫の方法は從來寫生的のもの多かりしも、こは寧ろ方眼紙上兩脚器を使用して製圖的に描くの簡易

にして且つ精確なるに若かず。

圖寫の場合に注意す可きは、同一種類の遺物は常に同一の比例尺によりて寫すことにして、ペトリイ教授は土器は六分の一、金屬の小器は二分の一に寫すを便せられたり、而かも其の分數は常に簡單なるものを用ゆ、 $\frac{3}{8}$ の如き比例は絶對に之を避く可じ。又た同一場所にて發見せられたる小遺物は之を鉛筆にて周圍を紙上に劃し、必要なる細部を記入するを利便とす。之を *Pictorial Inventory* と云ふ。又た土器の断面復原圖等を之を別圖として現はさず、同一圖中に加へ置くを以て便宜多しとす。(第一圖参照)



第一圖

三五、測圖。遺跡の平面を測圖するには其方法

精粗種々あり。吾人が野外の作業に於いて行ふに最も適當なるは、平面板 (Plane Table) 及び簡易測圖板 (Sketching Board) を用ゐるの法となす。

簡易測圖に於いては僅

に一面の畫板と磁石尺度を以て足れりとし、

距離の測定は通常歩測を以てするも、吾人は

之に代ゆるに卷尺^{テープ}其他の尺度を用ゆ可きなり。

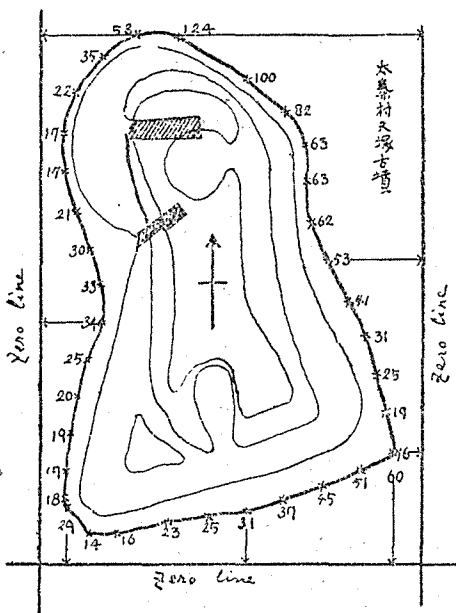
高さの測定は眼の高さを以て水準差を知

り之を定め、又た「バンド、レベル」等の器械を使用するも可なり。

大凡測圖は遺跡の種類により必要なる諸點の測定を遺却すること無く、無用の諸點は努めて之

を省略するに若かず。圖面の種類は平面圖^{プラン}の外立^{モトメ}面^{フェイス}斷面^{セクション}等^等各々必要ある可く圖面は現場に於いて方眼紙上に一先づ完成し置くに非ずんば、其の正確と完成とを期し難

きに至らん。



建築物の遺跡古墳等の全形を實測するには二箇或はそれ以上の基線を設けそれより所要測定物の輪廓に至る距離を差尺等にて測り平面圖を作るを便す。上圖は京都大塚村天塚古墳を此の方法によりて實測したるものに係る。

三六、記録 文字に

よる記録は寫真圖寫等によりて爲す能はざる時間的經過をはじめ、觀察調査の際に於ける判斷見解

等を記すものにして調査の當時最も明瞭に印象せられたることも、時過ぎては不正確となり或は忘却せらるゝを以て、決して自己の記憶を恃むことなく、文字を以て記録し置くことを要す。記録の範圍方法等は調査の遺跡遺物等によりて固より一定せず。而かも徒に詳密なるを貴しとせず、簡明にして要領を得るを主眼となす。如何なる事實が記録す可きものなるか等の判断は即ち學者の頭腦によりて自から差異を生ずる所なる可し。

三七、要之、調査の方法及性質の如何は考古學者と弄古家との區別を生ずる所以にして、吾人は一切の科學的方法を以て可及的に精確なる調査を行ひ、其の記録を製せざる可からず。以上述べたる調査の方法の如きは最も一般的のものを述べたるに過ぎず、而かも之が應用は机上の空論に非ずして、實地の經驗によりて漸く習熟するを得べきのみ。又た遺物の性質によりては顯微鏡の使用、

比重の測定其他の物理學的方法を以てするの要ある可く、更に定性定量の分析等化學的方法を使用すること亦た必要なる可し。新しき考古學は畢竟古き材料を如何に新しき方法を以て取扱ふかに存し、必しも珍奇なる材料を採求するの一途に出でざるなり。殊に化學的方法の應用は近き將來に於て考古學研究調査上に一新時期を劃するに至る可きを豫想せしむ。

三、遺跡の發掘(一)

三八、近世考古學が科學的立脚地を固くするに至れる原因一にして足らざるも、從來偶然の發見(Zufällige Entdeckung)に任じ來れる材料を豫め斯學の目的を以て一定の計畫の下に發掘(Planvolle Ausgrabung)せらるるもの多々に居る。乃ち「鍬の考古學」[Archaeologie des Spatens]なる語は近世考古學の別名なりと謂ふも不可なきなり斯くて從來發見地の不明共存遺物及存在狀態に關

する智識の不備は漸く充足せられ、考古學は獨立の立脚地を得て、其の古代文明の研究上に於ける職分は愈々重要視せられんとしつつあり。

三九、發掘者 考古學的發掘に於いて最も肝要なる準備は發掘者自身の人物と修養となり。其の學術的良心に富み、單に珍貴なる物品を獲る念に驅らるゝこと無く、考古學に關する各種の智識經驗を有す可きは言ふ迄もなく、事業に關する組織經營の才にも長ずることを要す。殊に交通不便なる地點に於いて發掘を行ふ場合に在りては、宿舍衛生運搬其他に就きて周到細密なる用意を怠る可からず。要するに發掘の指揮者は一面學者たると同時に、他面技師たるの資格を期待せらる。學者技師たると共に事業家たるの性質を具備せざる可からず。常に使役する人夫と共に現場に於いて土砂發掘其他土木的の事業に携はる覺悟あるに非ずんば到底其功を斯し難かる可し。

四〇、人夫 次に發掘に使役する人夫は發掘の事業と尤も重大なる關係を有す。日本内地の發掘に於いては、人夫の範圍常に制限せられて、選擇の自由少なしと雖も、支那朝鮮埃及等の發掘の如きに於いては其の選定に意を用ゐる可き場合多きを見る。而かも人夫は發掘に經驗あるものよりも農民の中より之を求むるを以て可とし、老年者よりも年少者を選む可く、少年少女の用ゐる可き仕事亦た少なからず。而かも事業の性質により日雇法或は仕事請負法の孰れかによる可し。即ち精密なる調査を必要とする場合には前者により、粗大なる發掘を繼續する時には寧ろ後者を經濟的となす又た貴重なる物品を發見せるものには、相當の酒錢を給することは、彼等の獎勵法となり、且つ發見物の隱匿を防ぐに効ある可し。

四一、發掘用器具 は運搬の煩勞を減ずる爲めに、成る可く發掘地附近に於いて購入若しくは借

入るゝを便とするも、地方の状況によりては豫め充分なる用意を要すること多し。但し土砂發掘に使用する普通の鍬鶴嘴シヨベルの類は人夫をして自家のものを持ち來らしむるを原則とす可し。其他普通古墳等の小發掘に要する器具概ね左の如し

(イ)發掘用 大形ナイフ、鎌、竹筥、佐官用コテの類、篩各種其他大工道具一式

(ロ)整理用 刷毛大小各種、バラフイン蠟、石膏等

(ハ)實測用 方眼紙、測圖板、磁石、クリノメーター、卷尺各種、折尺、ハンドレベル等

(ニ)荷造用 新聞紙其他包紙、籠、紐等

四二、發掘地點の選定 發掘に際して成形ある古墳等の外、其の發掘す可き遺跡の地點を選定若しくは發見すること最も肝要にして且つ困難なるを見る。抑々遺跡地たる徵證 (Indication) は遺跡其者の露出せる場合或は口碑記錄に残れる場合等

を除き、多くは土器破片の散布を以て普通の徵證となす。又た地下に礎壁もしくは堅穴の如きものある場合には、其の表面の地上に雨水の乾燥霜雪の溶解植物の繁茂、地踏の響音等に他と異なるものあること屢々なり。發掘者は宜しく此等細微の徵證に注意を拂ひ、銳利なる觀察を怠る可からず

四三、發掘の開始 發掘の地點を決定したる時は着手以前に先づ其の地點の精確なる位置を地圖上に記入し、其の表面の現上を寫真測量記錄するを要する是れ將に變形破壊せんとする遺跡に對する發掘者の第一の義務なり。次に愈々鍬を下すに際しては一定の方針計畫に本き、細心丁寧に發掘し、假令遺物の發見豫期の如からずと雖も、妄りに中止或は計畫を變ずることある可からず 遺物の發見無き時は其の無きを證するも亦た學術上の價值ありと信ず可し。其の發掘の周到精細は他人の將來同一地點に來るも何等の發見を期し難き程

度に至らしむるを理想とす可し。而かも一定の方針計畫とは初めより遺跡の状態等に豫想を違くするの謂に非ず。此點に於いては發掘者は寧ろ虚心にして何等先入の見なきを要す。

四、遺跡の發掘(一)

四四、發掘の方法 一の遺跡を發掘するに方りて諸方に無秩序に試掘的堅穴ピットを穿つことは單に多くの遺物を短時間に獲るの方法として或は可ならんも、遺物を破損し、他の遺物との關係を不明ならしむるを以て非學術的の譏を免れず。伊太利ポムベいの如きは從來斯種の方法によりて遺跡の破壊せられたるもの多かりき。されば若し地下に遺物の存否不明なる場合と雖も、並行せる横溝トレンチを設けて之を試みる可きなり。從來市街等の遺跡を發掘するに全地積を掘盡して、土砂を周圍に積上ぐるを常とせしが、こは建築物の層々相累りて存在する場合等には必要なるも、單純なる遺跡に於いては寧ろ「順掘り」(Turning over)の法を以てするを經濟的なりとす。

ては寧ろ「順掘り」(Turning over)の法を以てするを經濟的なりとす。

此法は一區域を若干の區劃に分ち、先づ第一區の溝を掘り、土砂を他側に堆積し、此區の調査を完了したる後、第二區を掘り返して其の土砂を以て第一區の穴を埋む。次で第三區の土砂を以て第二區を埋め、斯の如くにして全區に及ぶ可し。此法は土砂の堆積を小ならしめ、別に埋没するの勞を省く、又た家屋の遺址の如きは一室々々を斯の如き方法によりて發掘す可し。但し調査を再訂し、或は遺跡の状態を後人に示す可きものには此法を應用すること能はず。

四五、土砂の處置 發掘の土砂を如何なる方法により、何處に捨つ可きかは發掘の作業に於いて最も重要な問題なり。されば當初より將に發掘せらる可き土砂の量積を計算して、適當なる捨場を選定せざる可からず。餘りに遠き場所に運搬するは勞力の徒費なるも、近きに過ぐる時は作業の妨害を來し、又た發掘の進行に従つて更に之を他に移すの二重の手間を生ずること屢々なり。故に

寧ろ少しく遠きに過ぐる若かず。一の大なる堅穴を穿つに方りては、初めより全平面或はそれ以上を表面より順次掘り下ぐ可く、小さき穴を深く穿つ時は周圍の土砂常に穴中に落下して、二重の勞力を繰返すの外なきに至る。

土砂運搬は一二町以上の距離に於いては輕便軌道を敷設して土運車を使用するに若かず。穴中の深所より地上に移すには人夫をして一々擔ぎ上げしむることなく、彼等を鎖狀に立たしめ、土砂を入れたる籠を順序手渡しすること石炭積込の如くなさしむること最も便利なり。又た籠に網を附じ兩側より各一人をして之を引上げしむるも可なり。

四六、最後の武器 以上は發掘の作業に關する一般的の注意を述べたるに止り、遺跡の状態土地の狀況により臨機應變の方法を講ず可きや言ふを俟たず。而かもあらゆる文明の利器を用ゐ、時間と勞力の經濟を企圖す可きは勿論なりと雖も、愈々遺物の出現するに及びては吾人の用ゐる可き最後の武器は實に指瑞 (Finger end) に他ならず、

此際に於いては妄りに勞力を吝み、時間の經濟等を謀る可きに非ず、細心忍耐して遺物を完全に地上に取出すの工夫をなし、殊に土器の如きは濕氣を帯びて脆弱となれるを以て、暫く外氣に暴し堅くなれる後ち、底部より徐に掘起す可く、土砂に混せる小き珠玉類は其部分の土砂を篩にかけ或は水篩ひとなすを要す。

四七、發掘者の態度 は遺物の發掘に性急ならず常に勞力と時間に餘力を存して事業と確實と丁寧を期するに在り。由來邦人の性急なるや一長一短ありと雖も一時に多數の人夫を使役して一氣呵成に事業の完成を望むの風多きは、之を歐洲の考古學者が少數の人夫を用ゐて數年に亘る長時間を悠々事に從ふの類と頗る其趣を殊にす。多數の人夫を役して功を忙ぐは、往々發掘の周到を缺き、人夫は常に事業に熟練するの機會なく、其の功果に於いて少數の人夫を長時日使用するものと大なる

る逕庭を生ず。吾人は英人の所謂 Slow but Steadyなる態度を考古學的發掘に於いても大に之を學ぶの必要あるを覺ゆ。

五、發掘の後事

四八、發掘後の遺跡 發掘の作業繼續中吾人は隨時必要なる寫真測圖記錄を作成す可きは言ふを俟たず。其の發掘終了後は更に其の遺漏なきやを確めて、徐に土砂を以て之を埋没し原狀に復するを以て原則となす。若し遺跡發掘の狀態を其儘保存するの要ある場合は、近傍に散乱せる雜物を整頓し、土砂の崩壞を防ぎ、標木柵罫等を設くるの設備を講ず可きなり。殊に建築物の遺跡の如きは或る程度の修理を行ふことを要す。例へば羅馬パチノ丘の發掘の如きは、發掘は同時に修理と復舊とを意味せるものなりしを見る。發掘者は往々發掘の終了と共に後始末を顧みずして、其地点を去るものあり。是れ遺跡に對する吾人の道德的義

務を忘たるものと謂ふ可し。吾人は豫め復舊後始末に要する時日と費用とを豫め其の豫定中に加へ置き、之を以て發掘事業の一部と見做し置くこと最も肝要なり。

四九、發掘の遺物 は之を如何に處分す可きか其の全部を携へ歸りて調査するを原則とするも、若し搬出するの必要なきものあらば、之を遺跡の近傍に埋め置き、將來何等かの必要ある際に發見し易き様用意す可く、決して地上に散乱せしむ可からず。殊に人骨の如きは之に對して相當の敬意を拂ひ、斷片なりと雖も適當なる處置を怠る可からず。又た發見遺物は其地点番號を物品上に記入し、或る標附ラベルを附し、注意して之を根據地に持ち歸り、更に適當なる荷造を施し、大學博物館其の他の場所に運搬す可し。

遺物には成る可く番號地點を墨汁もしくは漆液にて其上に記入す可し。附標は往々脱落して混亂を來すの恐れあればなり。

又た破損せる物品は或る程度まで現場にて之を修補し置くを要す。

五〇、荷造^{カネ} は遺物の種類と運送の方法距離等によりて多少の相違ありと雖も、其の要領とする所は物品の保護す可き急處を注意し、荷物を運搬するもの及之を開くものは、箱の内容を知らざるものとして荷造を施す可く、而かも之を開く場合は可及的に荷造をなせるものを以て行はしむるに在り。容箱はビール箱茶箱等有合せのものをを用ゐる場合に於いても之に加工を施し、破壊を防ぐ可く、つめ物は藁匏屑新聞紙 Wood-Wool 等を豊富

に使用し、之を節約す可からず。土器は殊に細心の注意を要し、或は水張となし、別々の小箱に收め、然る後大箱に收む可く、決して石煉瓦等の重量品と同居せしむ可からず。其他物品に應じて適當なる處置を施す可く、荷造の如きは細事として之を他人に任じ去るは發掘者の最も戒心す可き所なり

以上發掘及調査に關する各項は余輩自身の經驗の外、主としてペトリー先生の指導及其著書 (Finders Petrie, Methods & aims in Archaeology) に據る處多し。詳細は同書に就きて見る可し。此章完了)

豊太閤の書狀につきて

文學博士 三浦 周 行

豊太閤の朝鮮役は當時唐入と申して居た程で、其大目的の証明にあつたことは周知の事實である。文祿元年四月に、小西行長等の第一軍が釜山

に上陸してから、我軍は到るところに敵陣を突破し、釜山城の陥落から二十日とたゞぬ間に、早くも漢城を抜き、尙ほも北進して、加藤清正の一軍